

和歌山は、表と裏が共存する、

「優しい混沌」の世界

知事対談

博物学者、小説家、神秘学者、収集家。様々な顔を持ちながら、そのいずれにおいても確かな実績を残し続ける荒俣宏氏が、自身多大な影響を受けたと話す南方熊楠、また熊楠を生み育んだ和歌山の自然や歴史について仁坂知事と語り合う。現代における、知の巨人の目に映る、和歌山の実像とは――。



荒俣 宏 × 仁坂吉伸

仁坂 私も古い図鑑をいくつか持っているんですが、昔のイラスト中心の図鑑は美術品としての価値もありますよね。それに文章にロマンがある。私は博物学という学問は、最もロマンにあふれた学問ではないかと思ってるんです。科学的な実証ももちろん大事ですが、人間が自然や他の生物に対して抱く夢や幻想を追いかける、これが博物学ではないかと。ですから夢いっばいの幻想的な世界を存分に読者に想起させてくれる荒俣さんの『世界大博物図鑑』は、博物学の真髄を著した名著だと思っております。

荒俣 ありがとうございます。博物学の面白いところは、科学的には存在しないとされている、例えば妖怪であっても研究対象にできる点にあると思います。

博物学には ロマンや美学がある

仁坂知事(以下仁坂) 私は荒俣さんが研究されている博物学のファンの一人なんです。がいつ頃から博物学に興味を持ち始められたのでしょうか。

荒俣宏氏(以下荒俣) 小、中学生の頃ですね。当時代の近所に貸本屋があつて、そこで借りた手塚治虫さんの『ジャングル大帝』にのめりこみまして。漫画の舞台となった動物や昆虫の宝庫であるアフリカに強い憧れを抱き、いつか訪れたいと思うようになって、今で言う自然科学などの情報を集め始めたんです。でも当時は学校の図書室にさえ図鑑が何点かあるぐらいで、自然に関する本は充実していません。そこで、研究者の方に直接手紙を書いて教えを乞うたんです。

仁坂 小、中学生の時にすごい行動力ですね。どんな方にどんな内容の手紙を送ったんですか。

「歌合せ」という、和歌を対戦形式にした平安時代の遊びに関する興味深い話がありました。「カジカガエル」というテーマに対して一方は待てども恋人は来ない。聞かえてくるのは朝から晩までカジカガエルの声だけ」と詠み、一方は「夕方になると寂しさからカジカガエルの声が身にしみた」と詠んだところ、後者が勝った。理由は技術的、文学的な優秀ではなく、「カジカガエルは夕方しか鳴かないから」というもので、これはまさしく博物学の観点。昔から日本人はロマンや美学を追い求める文学に、博物学的な要素を見出してきたわけで、裏を返せば、博物学にロマンや美学を求めることもできるはずなんです。

最先端の技術を 寛容に伝える和歌山人

荒俣 和歌山には南方熊楠や*畔田翠山など、知事や私と同じように博物学にロマンや美学を求めた偉人が生まれていますね。熊楠にいたっては、文学のみならず、仏教思想まで博物学に見出した。和歌山出身者にはユニークで先鋭的な人物が多いような気がします。二十数年前に龍や火の鳥といった「幻獣」が登場するアニメーションの制作に取り組んだものの、グラフィックデザイン技術が追いつかず暗礁に乗り上げたんです。その際に紹介されたデザイナーが、和歌山に本社がある(株)

荒俣 「日本野鳥の会の設立者、中西悟堂さんをはじめ錚々たる方々に生物の生態や捕え方などを教えてもらいました。おかげでその分野には詳しくなりましたが、世間の流行には疎かったために同級生とはまったく話が合わず、孤独な学校生活を送るはめに(笑)。それでも生物、特に昆虫への興味は尽きることなく、採集したり古い文献なども漁るようになったんです。江戸時代における蝶の*展翅方法はどうだったのかとか、そんなことばかり調べていましたね。サラリーマン時代には、同じく昆虫マニアの先輩と目ごと虫の話に熱中したり、図鑑を収集したりしていました。周りからはそんなことばかりをしていないで家や車を買えとか、美人の奥さんもらえとか言われましたが、一切関心がなかったですね。

仁坂 でも、美人の奥様とご結婚されていますか。

荒俣 人生はわからないもので(笑)。とにかく周りの人間が心配するほど昆虫に熱中していましたね。

ある時有名な昆虫研究者の長谷川仁さんの家を訪ねたんです。すると、おびただしい数の資料を所蔵しておられて。中には昆虫を題材にした小説や漫画まであったんです。収集家として自分はまだまだだと痛感すると共に、そこでまた収集し続ける気持ちを新たに

*標本にするため、昆虫などの羽を広げること。

Profile

荒俣 宏 (あらまた ひろし)
1947年東京生まれ。博物学者、図像学研究者、小説家、収集家、神秘学者、妖怪評論家、翻訳家、タレント。85年小説『帝都物語』シリーズ(全6巻)を刊行開始。ベストセラーとなり、87年には日本SF大賞を受賞。また同年から、『世界大博物図鑑』(5巻+別巻2巻)の刊行を開始(94年完結)。現在もジャンルを越えた執筆活動を精力的に行っており、その著書、訳書は300冊以上に及ぶ。南方熊楠に関しては、『南方熊楠―奇想天外の巨人』などがある。



新著紹介
『アラマタ美術誌』
古今東西、楽しい美術の逸話が満載。

荒俣 宏 × 仁坂吉伸

和歌山は、表と裏が共存する、「優しい混沌」の世界



混在し、海岸沿いに高山植物がある一方で、本
来海岸線に自生する備長炭の原料のウバメ
ガシ林が山中にあたりする。私はこの様を
「優しい混沌」と呼んでいるんですが、和歌山
は様々な自然、文化、そして人間が絶妙なバ
ランスを保ちながら共存している。異質なも
のを排除せずに受け入れる優しさが、和歌山
には昔からあると思います。

荒俣 異質なものを受け入れ、共に生き
る。日本人の精神性の原点と言えますね。
和歌山には様々なものが共存する自然環
境があるからこそ、拒絶反応を起こさな
い宗教システムや人間性が成立している
のでしょう。博物学もまた、どんな事象で
も受け入れ研究対象にする学問。そのよ
うなお話を聞くと、熊楠ら偉大な博物学
者が和歌山に生まれたのは必然だったと

正、廃藩置県など主要政策の提唱を真っ先
に行った人物なんです。また全国に先駆けて
紀州に近代的な洋式軍隊を組織し、西郷隆
盛に「総理大臣にしたい」とまで言わしめた
*津田出、前島密の上司、初代駅通頭として
日本の郵便制度の礎を築いた*濱口梧陵も
和歌山生まれです。

荒俣 すごくですね。しかしながらその功
績は、薩長との力関係の前に歴史で埋没し
てしまった。

仁坂 そうです。しかし、和歌山の人間はそ
れを良しとしてしまう。執着しないとい
うか、寛容というか。カツオの一本釣りも今で
は高知が有名ですが、そもそもは和歌山が
ルーツで技術を伝えたんです。醤油もルー
ツでありながら、千葉の銚子に教え投資ま
で行っている。和歌山は多くの技術や文化、
思想の発祥の地なんです。それらを惜し
むことなく広めてきたん
ですね。

荒俣 そう言えば熊楠も
「安藤みかん」と呼ばれる
みかんを、グレープフルー
ツに似ているとして海外
へ輸出しようと計画して
いましたね。起業家に必
要な要素が、和歌山の
人々の心の中に受け継が
れていると感じますね。



さえ感じます。

熊楠は明治期の神社口社政策に対して、
歴史的、文化的側面はもちろん、植物生
態学やエコロジーの観点からも反対運動
を展開しましたね。エコロジー自体は熊楠
たち博物学者がドイツから輸入した言
葉、概念ですが、和歌山の自然に育まれた
熊楠であれば、外国の思想に影響されず
ともいわずれ独自に着想したのではないで
しょうか。

仁坂 偉大な人物でありながら、時に大酒
を飲んで暴れるなど常識外れの行動をとる
熊楠を、実弟はもちろん、縁戚関係にない
人々までが献身的に支えていた。この事実も
また、和歌山人の寛容の心を示すエピソード
と言えると思いますね。

**稀有な世界遺産を
伝え、守り続ける**

仁坂 お話いただいたように和歌山の自然
は独特なものです。2004年「紀伊山地
の霊場と参詣道」が世界遺産に認定されま
した。

荒俣 現在に至るまで実際に使用されてい
る道であるという観点から、とても重要な
世界遺産だと思います。今現在も生きて
いる、そして人間が使い続けている。おそ
らく日本でも数少ないタイプの世界遺産で

和歌山は日本人の 精神性の原点

仁坂 私は和歌山人の寛容な人間性は、和
歌山の自然環境に起因していると考えてい
るんですが、荒俣さんは和歌山の自然につ
いてどのような印象をお持ちですか。

荒俣 紀伊山地に広がる常緑広葉樹林帯と
いうのは、太陽の光があたり緑や昆虫、鳥で
あふれる「表の世界」と、陰鬱でジメジメとし
てカビや粘菌などの隠花植物が住む「裏の
世界」、この2つが同居している。元来別々に
世界を形成している。表裏が分け隔てなく
共存しているという特殊な自然環境が、ユ
ニークな和歌山の文化、人間性などのベース
になっているのではないのでしょうか。

仁坂 熊野信仰には「老若男女、貴賤、浄不
浄、信不信を問わず」という言葉があります。

仁坂 道が守られてきたという事実は、そこ
に住む、または利用する人々がいかに寛容の
精神を持っていたのかについての証左ではな
いかと。土地の持ち主の中で誰か一人でも閉
鎖的な考えを持っていれば、道が途絶えてし
まう可能性もあったわけですからね。

荒俣 世界遺産を体感した人々がその素晴
らしさ、尊さを実感すればさらなる保護にも
つながるのではないのでしょうか。平安時代に
藤原家の内紛に巻き込まれ憔悴し、熊野に
やつてきて癒されたという花山法皇の気持ち
になりながら歩いてみたり、いろんな人間が
関わってきた世界遺産だからこそ十人十色
の楽しみ方ができると思いますね。

仁坂 実は認定以前の熊野古道は一般には
忘れられた存在で、戦前は歩く人も多く宿
場もあったんですが、戦後の復興に躍起に
なっていた影響からか見向きされなくなっ
た。世界遺産に認定されたことでその存在が
再びクローズアップされたんです。しかし一
旦広く認知されると損なわれる可能性もあ
りますから、2008年に景観条例を制定
するなどして、保全に力を入れています。

壮大な自然とそれに抱かれ育まれた先人の
寛容の心、その心が守り続けてきた道、すべ
てを次世代に受け継いでいくことが、我々現
代人の使命だと思います。本日は貴重なお
話をありがとうございました。



くろだ すいざん
畔田 翠山
(1792-1859)

本名、源伴存。紀州藩十代藩主徳川治宝
によって医師としてかかえられ、和歌山だけ
でなく、畿内、北陸方面など各地の物産調
査や採集などを行った。日本最初の総合水
産動物誌「水族志」や江戸時代の百科事
典とも言えるべき「古名録」など実証的で地
方の動物誌、植物誌を学術的にまとめあげた研究は、従来の本草学
を博物学へと発展させたといわれる。



むつ むねみつ
陸奥 宗光
(1844-1897)

明治時代の外交官、政治家。1867年に
坂本龍馬の下で海援隊に入って活躍。明
治維新後の1872年には租税権頭に任じ
られて地租改正を建議した。元老院議員な
どを経て第二次伊藤博文内閣の外務大臣
となり、1894年日英通商航海条約の調印
にこぎ着け、治外法権の撤廃に成功。さらに1895年全権として日清
戦争の講和条約に調印するなど外交面で主導的な役割を果たした。



つだ いずる
津田 出
(1832-1905)

幕末から明治期に活躍した官僚、陸軍軍
人。江戸で蘭学を学んだ後帰藩して要職に
就いたが政争に破れ隠居。王政復古で赦
免され、和歌山藩の執政、大参事として、徴
兵制度など明治維新の原型とも言われる
藩政の大改革を行った。明治政府は津田
の実力を高く評価。廃藩置県後、陸軍少将、元老院議員、貴族院議
員(勲撰)を歴任した。



はまぐち ごりょう
濱口 梧陵
(1820-1885)

紀州から銚子に醤油作りを伝えた濱口家
本家の養子となり、濱口儀兵衛商店(現ヤ
マサ醤油)の7代目を継ぐ。帰郷中、安政の
大地震により大津波が発生。梧陵は、村人
を誘導するため自家の稲むらに火を放ち、
多くの命を救った。また私財を投じて被災し
た村人の家を建て、大堤防を築造。1871年には初代駅通頭(後の郵
政大臣)に就任した。